言葉は鏡

中一

「あのね、言葉は鏡みたいなものなの。優しい言葉でニコニコ話しかけてみてごらん。きっと笑って優しい言葉を返してくれるから、絶対に友達になれるよ。」
と幼い弟に母がそう話していた。幼稚園の弟が進級した新しいクラスの中に、みんなに嫌なことを言う子がいて、
「遊ぶのは嫌だな、嫌い。」
と弟が言っていたからだ。

　ぼくは小学生のころ、母が同じように言葉を鏡に例えて話してくれたことを思い出した。一年生の時から野球チームに入り、毎週土日は朝から夕方まで一生けん命頑張っていた。ただ、ぼくはひどい乾燥肌で秋ごろから冬の間は手荒れがとてもひどく、病院でたくさん薬を出してもらうほど悪化するアレルギー性皮ふ炎になる。手のあちこちが切れ、痛くて眠れないときもあり、夜は薬を何種類もぬって手袋をする。朝に外すと少し良くなっているけれど、学校へ行くとまた切れて悪化する、の繰り返しだ。好きな野球も、ボールが持てない、バットがにぎれない。そんなときは、ぼくだけマラソンや見学になり、つらかった。しかし、もっとつらいことがあった。外の乾燥した空気にさらされたぼくの手は、血行が悪くなり黒っぽく、ガサガサと皮がめくれて炎症ではれてしまう。そんな手を見たチームメイトに、
「うわっ、気持ち悪い。人間の手じゃなくて、ゾウの手じゃん。」
と笑われたことがある。その子は、ほんの軽い気持ちで言ったのだと思う。しかし、ぼくはとてもつらかった。気にしていることであり、自分ではどうにもできないことだからだ。それからも、
「げっ、血だらけ、こわっ。」
とか、
「何でそんな手になるの、やばっ。」
などと言われたりした。くやしく思っていたぼくはある時、
「〇〇なんか〇〇じゃん。」

と、その子が嫌がり気にするだろう言葉を言ってしまった。気にしていることを言われてぼくは傷付いたのだから、悪いとは思わなかった。しかしなぜか、言葉の仕返しは全然すっきりせず、さらに嫌な気持ちになった。そのことを母に話したら、

「相手の気持ちを考えて言葉にすれば優しい言葉で返ってくるし、思いやりのない言葉を言えば心ない言葉で返ってくると思う。そして言葉は、乱暴に使ったり、扱い方を誤れば割れてしまい、その鋭さで相手を傷付けてしまうの。だから大切に使わないといけない、鏡みたいだね。」

と教えてくれた。

　ぼくは、心ない言葉を言ってしまったチームメイトに、

「ごめん。」

と謝った。そして、気にしているから手のことをもう言わないでほしいと伝えた。そうしたら、その子も、

「ごめん。」

と謝ってくれて、それからは、

「大丈夫？」

と心配する言葉をかけてくれるようにもなった。皮ふ炎の悪化は野球が原因ということもあって、四年生で野球を辞めることになったけれど、今でもチームメイトは大切な友達だ。

　言葉にはすごい力があると思う。心を込めた一言で人を元気づけたり、生きる力をあたえることもできる。その反対に、心ない一言で簡単に人を傷付けたり、生きる気力をうばってしまうことさえもある。言葉で負った傷は、言った相手の目には見えないけれど、とても痛いのだ。人はだれにでも顔や身体の特徴があって、本人ではどうしようもできないこともある。それを責めるのではなく、認めることが大切なのだと思う。

　ぼくは、相手の気持ちや立場を考えて温かい言葉をかけられる人になりたい。

「言葉は鏡」

思いやる心をもって、大切に使っていこうと思う。